

令和元年6月9日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(S)

研究期間：2013～2017

課題番号：25220909

研究課題名（和文）わが国における都市史学の確立と展開にむけての基盤的研究

研究課題名（英文）Establishment and Development of Urban History in Japan

研究代表者

伊藤 毅 (Ito, Takeshi)

東京大学・大学院工学系研究科（工学部）・名誉教授

研究者番号：20168355

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 149,850,000円

研究成果の概要（和文）：わが国初の都市史研究のプラットフォームを構築するために、建築のみならず歴史、都市計画、地理学などの諸分野の研究者に広く呼びかけを行い「都市史学会」を2013年12月に創設した。これを基盤として学際的研究を積極的に進展させ、その成果は『都市史研究』1号～5号（山川出版社、2014～18年）として結実している。研究代表者・分担者はそれぞれ独自に調査活動・出版企画・研究集会を実施した。旺盛な研究調査活動のひとつの到達点として、日本の都市史にかんする叢智を集約した、都市史学会編『日本都市史・建築史事典』（丸善出版、2018年）が刊行された。以上の活動は本研究の目に見えるかたちでの高い水準の成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果は従来ほとんど周縁的な位置にしか置かれてこなかった都市史研究を一挙に総合的な学術分野へと押し上げた点にその学術的・社会的意義が存する。諸外国では都市史研究はひとつの重要な分野としてすでに確立しているにもかかわらず、わが国ではその重要性がかならずしも自覚されていなかったことが一つの原因であった。本研究では都市史研究の魅力や学術的水準の高さを社会に示すため、多くのシンポジウム、学会活動、出版企画、講演企画などを次々と打ち出し、さらにフランス、イタリア、アメリカ、アジアなどの諸外国との連携にも取り組んだ。その副産物として、日本・中国・韓国における東アジア都市史学会が2018年に創立された。

研究成果の概要（英文）：In order to establish and develop urban history in Japan, we made the first platform of interdisciplinary society as the Society of Urban and Territorial History joined by architecture, historian, urban planning and geography researchers in December 2013. Based on this platform, we have been making activate urban studies these five years and the number of outputs have been opened in public more than before. Our main outputs have been shown in our periodical journal Toshishi Kenkyu, Yamakawa shuppansha since 2014 to 2018. The main members of this research tries to develop urban studies and finally we could realize to publish the dictionary of Urban and Architectural History in Japan, Maruzen Shuppan in 2018, which can be regarded as the most important and highest results of our research.

研究分野：都市建築史

キーワード：都市史 建築史 領域史 都市史学会 研究プラットフォーム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

わが国で都市史学が学融合をともないつつ本格化したのは比較的近年のことである。人類の居住の基礎学たる都市史学を推進するための学的基盤はいまだ確立されていない。諸外国ではアーバン・ヒストリーの重要性について共通理解がすでに成立しており、学会ないし協会として堅固な組織が多様な学際的活動をともなつて稼働しているのに対し、わが国の都市史学の重要性に対する認識は不十分な段階にとどまっていた。

伊藤毅（建築史）と吉田伸之（日本史）は四半世紀に及ぶ研究連携の実績と、その一つの到達点としての『伝統都市1～4』（東京大学出版会、2010年）の出版を対象として2012年日本建築学会賞（業績）「学融合による都市史研究プラットフォームの構築」を受賞した。この受賞理由のなかに、都市史学の今後の展開のための基盤形成について大いに期待する文言が含まれていた。各研究分担者はすでに高度な学的達成を行い、その下で有力な若手都市史研究者が分厚い裾野を形成している。いまこそ都市史学統合の好機が到来したというのが研究開始当初の状況であった。

2. 研究の目的

1980年代以降本格化したわが国における都市史学は、いまだ個別分散的であり一つの学問領域に統合されるには至っていない。都市史学は学的融合が不可欠な分野であり、これを実質的に担う研究者が限定されることがひとつの原因である。本研究はわが国における学際的都市史学の牽引者・第一人者が一堂に会し、この間蓄積してきた学的達成、人的ネットワーク、国際的連携実績を一挙に結集し、わが国における都市史学の組織基盤を確立するとともに、このプラットフォーム上で最先端の研究論題を全面展開し、成果を社会化することを目的とする。都市史学はいまや全世界が直面する都市的危機の淵源を再考する基礎的・総合的学問領域である。この基盤形成と研究展開を通して、若手研究者の育成および研究成果の国内外への発信と還元をはかる。

3. 研究の方法

本研究はわが国最初の都市史学の学的基盤を確立すること（A組織）と従来の膨大な研究蓄積の上に立った新たな都市史学を展望するための独自の研究論題群の提示（R研究）そしてその結果として国内外に広く発信しうる良質のアウトプット（O成果）の3軸が相互に密接な連携をもちつつ、実現可能なかたちで位置づける。わが国における居住の基礎学として都市史学の基盤をつくり、国内外への発信と若手研究者の育成を通して、今後の都市のあり方を現代都市の問題と対峙しつつ提示することを目指す。



4. 研究成果

以下の組織を立ち上げ、研究部ごとに下記に示す研究論題に取り組み成果をあげた。

A 研究組織

- A0 都市史研究センター = 都市史学会 (東京大学内に設置、全体を統括)
- A1 地域学研究部 (飯田市歴史研究所内に設置、代表吉田)
- A2 アジア学研究部 (花園大学文化遺産学科内に設置、代表高橋)
- A3 テリトリオ学研究部 (東京大学内に設置、代表伊藤)
- A4 東京学研究部 (法政大学エコ研究所内に設置、代表陣内)
- A5 欧米学研究部 (樺山研究室内に設置、代表樺山)

R 研究論題

- R0 統合都市史学 都市社会史 / 都市空間史 / 都市文化史
- R1 伝統都市論 (吉田・伊藤) 社会=空間構造論 / 権力・ヘゲモニー論 / アイデア=インフラ論
- R2 宗教都市論 (高橋・樺山) 日本宗教都市論 / アジア宗教都市論 / 欧米イスラム宗教都市論
- R3 領域景観論 (伊藤・陣内) テリトリオ=セグメント論 / 景観構成論 / 沼地・荒地論
- R4 居住環境論 (陣内・高橋) 居住類型論 / 環境文化論 / 危機都市論 / 小規模場所論
- R5 比較類型論 (樺山・陣内) 地域=文化構造論 / 首都・世界都市論 / 水都・ネットワーク論
・若手研究者育成プログラムとしてオランダ・フランス・イタリア・アイルランド調査研究の実施と国際研究者交流を積極的に推進した。

0 成果として都市史研究センター = 都市史学会の学術誌として 00 『都市史研究』(山川出版社)の刊行(すでに第1号~5号公刊済み)と国際シンポジウムの開催とその成果刊行が以下のように実現した(2013年11月日仏国際シンポジウム「空間・身分・制度」、2014年10月日仏国際シンポジウム「中近世ラングドックの領域史」、2016年2月「中近世ヴェネトの領域史」、2018年3月国際シンポジウム「都市史から領域史へ」)。

研究論題のなかで東京研究を進めるとともに、国内外の都市史研究交流と若手を中心とした調査研究を進めつつ、以下の成果を公刊し、本研究のまとめとする。

- 01 『都市史叢書』(上記R1~R5の成果を統合したR0の論集、2020年度刊行予定、A0担当)
- 02 『日本都市史・建築史事典』(都市史学会編、丸善出版、2018年11月刊行済み A0担当)
- 03 『東京の歴史』(全10巻、吉川弘文館、現在吉田・陣内を中心に2017年度から順次出版開始、現在第5巻まで刊行済み R1・R4、A1・A4)
- 04 『都市史図集』(科研組織の下に若手研究者を組織し、編集スタート、R1・R4・A1・A4担当)
- 05 都市史研究国際ケーススタディ(順次成果を『都市史研究』に掲載)
アメリカ都市史学会、イギリス都市史学会、フランス都市史学会、イタリア都市史学会、ロイヤル・アイリッシュ・アカデミー、アムステルダム都市史学会、アジア都市史学会等の国際学会との密接な連携を確立・保持し、協定および研究成果の活字化を行う。
このなかで特筆すべきは中国・韓国と日本の3国間で綿密な議論が行われ、2018年6月まったく新しいアジアの学術組織である「東アジア都市史学会 The East-Asian Society for Urban History」が創設され、伊藤はその設立総会にて基調講演を行った。今後毎年3国間で国際交流を念頭においた都市史研究の進展をはかることになる。なお電子ジャーナルである Journal of the East-Asian Society for Urban History は2019年度中に創刊予定である
- 06 海外調査研究成果として以下の出版物が刊行される(刊行済みのものも含む)
・伊藤毅編『フエ - ベトナム都城と建築』(中央公論美術出版、2018年3月刊行済み)
・伊藤毅編『イタリアの中世都市 - アゾロの建築・都市・領域』(鹿島出版会、2019年度刊行予定)
・伊藤毅編『オランダ・フリースラントの建築・都市・領域』(中央公論美術出版、2019年度刊行予定)
- 07 大学都市研究の学際的成果として、伊藤毅企画編集・樺山紘一他著『東京大学が文京区になかったら』(NTT出版、2018年刊行済み)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

- 伊藤毅・吉田伸之他著「時代と歩む都市史研究 『シリーズ三都』刊行開始にあたって」『UP』559号(東京大学出版会、2019年5月)
- 伊藤毅著「葛飾柴又の文化的景観」『東京人』都市出版 2018年11月
- 伊藤毅著「植民地都市の広がり」『都市史研究』5号 2018年11月
- 伊藤毅著「領域的観点から見た日本の都市史」 Journal of the East-Asian Society for Urban History, The Inaugural International Conference of the East-Asian Society for Urban History, Seoul, Jun 2018.

[学会発表](計1件)

- 伊藤毅「フィードバックされる『西洋』の知見」2017年度日本建築学会(中国)建築歴史意匠部門研究協議会「フィールドとしての西洋を問う」主題解説 金沢工業大学 2017年9月
- [図書](計18件)
- 陣内秀信・高村雅彦編『建築史への挑戦 住居から都市、そしてテリトリーへ』(鹿島出版会、2019年)
- 都市史学会編(伊藤毅編集委員会委員長)『日本都市史・建築史事典』(丸善出版、2018年)

伊藤毅企画編集・樺山紘一著『東京大学が文京区になかったら』(NTT出版、2018年)
伊藤毅編『フエ - ベトナム都城と建築』(中央公論美術出版、2018年)
都市史学会編『都市史研究 5』(山川出版社、2018年)
吉田伸之編『山里清内路の社会構造: 近世から現代へ』(山川出版社、2018年)
都市史学会編『都市史研究 4』(山川出版社、2017年)
伊藤毅編『中近世ヴェネトの領域史 Territorial History of Veneto during the Medieval and Periods』(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻伊藤研究室、2016年)
都市史学会編『都市史研究 3』(山川出版社、2016年)
都市史学会編『都市史研究 2』(山川出版社、2015年)
樺山紘一『描かれたオランダ黄金世紀』(京都大学学術出版会、2015年)
陣内秀信『イタリア都市の空間人類学』(弦書房、2015年)
吉田伸之『都市 江戸に生きる』(岩波書店、2015年)
高橋康夫『海の『京都』 日本琉球都市史研究』(京都大学学術出版会、2015年)
伊藤毅編『中近世フランス・ラングドックの領域史 Histoire de territoires dans le Languedoc médiéval et moderne』(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻伊藤研究室、2014年)
都市史学会編『都市史研究 1』(山川出版社、2014年)
伊藤毅「近世都市の成立」『岩波講座日本歴史第10巻 近世 1』(岩波書店、239-276頁、2014年)
伊藤毅編『空間・身分・制度 日仏都市史のパーспекティヴ Espaces, Statuts et Institutions: Perspectives Franco-Japonaises en Histoire Urbaine』(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻伊藤研究室、2013年)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
都市史学会 <http://suth.jp>
伊藤毅研究室 <http://itolab.jp>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：樺山紘一

ローマ字氏名：Kabayama Koichi

所属研究機関名：東京大学

部局名：大学院人文社会系研究科(文学部)

職名：名誉教授

研究者番号(8桁): 30027544

研究分担者氏名：吉田伸之
ローマ字氏名：Yoshida Nobuyuki
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院人文社会系研究科（文学部）
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：40092374

研究分担者氏名：陣内秀信
ローマ字氏名：Jinnai Hidenobu
所属研究機関名：法政大学
部局名：デザイン工学部
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：40134481

研究分担者氏名：高橋康夫
ローマ字氏名：Takahashi Yasuo
所属研究機関名：京都大学
部局名：工学系研究科（工学部）
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：60026284

(2)研究協力者 該当無し
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。